

私たちはなぜ文化遺産を保存修復するのか

上智大学教授 石澤良昭（上智大学アンコール遺跡国際調査団長）

1. アンコール・ワットとカンボジア内戦

カンボジア西北部のシェムリアップ市郊外には世界的に有名なアンコール・ワットをはじめ、主要な遺跡 62 ヶ所があり、ちょうど東京 23 区ほどの広さである。そこは約 550 年にわたりアンコール王朝の首都があったところで、各時代の王たちが造営したたくさんの寺院・僧院・祠堂・貯水池・橋などの大遺跡が集中して見られる。現存する遺跡はほとんど石造りである。

私たちは 1980 年からアンコール遺跡群の保存修復・調査・研究を手伝っている。カンボジアでは 1970 年から内戦に入り、国連の P K O 活動が始まる 1993 年までの 24 年間にわたり国内は混乱し、そのために遺跡の保護活動は止まり、放置されてきた。

私はカンボジアの文化遺産を破壊から救済するため、1980 年から国際赤十字の救援機に乗ってアンコールに出かけ、応急保護工事などを手助けしてきた。さらにカンボジアは 1980 年から 1989 年まで 10 年あまり内戦中ではあったが、政治的抗争中の 3 派連合政府や実行支配中のヘンサムリン政権も遺跡の保護と救済には同意していたので、錦の御旗を掲げて、食料も十分でないカンボジア人作業員と共に毎日数ヶ所の遺跡を駆け回っていた。

2. なぜ私たちがアンコール遺跡の保存修復を手伝うのか

アンコール・ワットをはじめ、これらの文化遺産はカンボジア民族の誇りと伝統の象徴である。その保存修復と維持は、そこに住む人たちの手でなされることが必要である。この民族の固有な文化遺産を世界に向かって説明できるのは、誰よりも現地に暮らすカンボジアの人々である。アジアの文化遺産などの調査研究と保存修復は、何と云っても現地当該国における専門家の手によ

りなされることが理想とされている。しかしながら、カンボジアではポル・ポト政権の時代（1975 - 1979）に遺跡の保存修復の専門家約 36 名がほとんど不慮の死に追いやられた。遺跡調査・保存修復する専門家がゼロになってしまったのである。なぜ私たち日本人がカンボジア人の文化遺産専門家を養成するのかという理由を御理解いただけたと思う。

アンコール遺跡の保存修復事業はカンボジアの人たちの精神的復興の一助となり、本当の意味での自負と自信を取り戻す一つの契機になることを願ってきた。そして観光等の活用によって得られた文化的経済的収益は、その国（地元）に還元され、調査研究と保存修復の学術的自立に役立つと同時に、経済的自立と地域発展の一助にされなければならない。

専門家が不在になってから現在まで、24 年の歳月が流れ、人材養成プロジェクトを開始して 11 年目にしてやっと、新進気鋭の遺跡専門研究の候補者が成長してきた。

3. カンボジア人専門家養成プロジェクトは中長期計画で

上智大学アンコール遺跡国際調査団（以下、調査団）は、前述の通り 1980 年から遺跡保護の応急工事などを手伝ってきた。応急工事といっても石材の落下を防ぐ支柱を立てるとか、遺跡内に貯まった水を抜くとか、熱帯の植物の下生えを除去するとか、村人たちの手による保護活動が中心であった。

カンボジア人の緊急人材養成プロジェクトは、1990 年 3 月から始まった。それは考古発掘調査および保存修復を指揮できる将来の遺跡保存官および中級レベルの技術を持った作業員と石工の養成であり、現在も続いている。

プノンペンの王立芸術大学考古・建築両学部の学生の現場研修は、バンテアイ・クデイ遺跡で行われている。1995 年から、両学部の学生 5 名ずつを選び、彼らは毎年 3 月・8 月・12 月に調

査団に参加し、日本人の先生方からより実践的な現場研修の指導を受けてきた。これら学生は、8年前芸術大学が再開されると同時に入学してきた学生たちである。上智大学では、彼らが合宿して講義を受け、出土品の処理や図面作成ができるアンコール研修所（2階建て、約290平方メートル）を1997年に建設した。

芸大卒業後彼らを研修生として採用し、この研修所に出勤して課題をこなし、引き続き日本人の先生方の指導を受けている。これまで実習に参加してきた研修生の中から4枚が選抜され、奨学金を受けて上智大学大学院地域研究専攻で学位を取得するために来日し、在学している。彼らは修士課程においてアンコール遺跡研究についての学位論文を準備している。

4. 遺跡・村落・森林との共存共生プロジェクト

私たちは遺跡の保存・修復だけすれば良いと考えているのではなく、遺跡の周辺で生活している村人たちの村落社会の発展と民族文化を再興するプロジェクトも現在進めている。つまり遺跡保存修復と併せて、人間と自然と文化を考えるプロジェクトを1991年8月から始めている。近隣森林の自然環境の調査（植物生態など）およびバンテアイ・クデイ遺跡周辺の村落調査や水利・水質調査などが実施されている。さらにシェムリアップ州の無形物産財についての調査、特に小型影絵芝居、トロット（鹿頭行列）などのインベントリー作成調査や伝統文化の調査成果が積み上げられている。これが「村落」と「森林」と「遺跡」の共存共生プロジェクトである。

5. 発掘・保存修復を通じた文化復興協力

私たち調査団には日本の9大学と5機関が参加し、次のような方針と哲学を掲げて活動している。

第1：カンボジアの文化遺産はカンボジア人の手で責任を持って守ること。カンボジアの文化遺産はカンボジア人の専門家が保存修復し、これを後世に伝えていくべきであるという考え方が

ら、それを守る専門家（研究者と技術者）の養成が 11 年目に入っている。カンボジアの自立を授ける人材養成である。

第 2：文化遺産の調査・研究と保存修復事業の密なる連携。文化遺産の保存修復は破壊箇所を直して後世に伝えれば良いというだけでは不十分である。それらの文化遺産がどの時代の、どんな材料で作られ、その目的、その宇宙観、様式などの科学的解明に基づかない修復は、本来のものを破壊することになる。つまり、綿密な学術的調査・研究に連動する保存修復でなければならない。

第 3：遺跡保存の修復研究における中長期的展望の必要性。綿密な遺跡調査を行うとともに、これに基づいた中期的および長期的なマスタープランに従って保存修復について考えなければならない。長期とは 30 年、50 年という単位で保存修復を継承し、伝統工芸や技法を再発見評価していく。カンボジアにおいて使えるように改良しながら先端技術と土着工法を組み合わせしていくということである。遺跡を取り巻く自然環境についても、水利灌漑や植物・生態環境も長期的な展望に基づき考える必要がある。文化協力は地味な長期にわたる仕事なのである。

6. カンボジアの「文化」を学び、日本人を考える

日本において東南アジア地域の言語を学び、考古学や建築学を修めた専門家は、その数が限られている。日本人のほとんどは日本の技術は最高で、援助する金もあり、有能な研究者・専門家がいると考えている。だから日本がカンボジアにやってあげるという意識が潜在的にある。

このようにアジアの中で日本上位の考え方に立つと、そこには相互の信頼関係は生まれてこない。私たち 21 年の経験に基づいて言えることは、カンボジアなどの熱帯アジアと日本とでは風土が異なり、想像できないような障害のために日本方式の技術や方法論が必ずしも有効とは限らないということである。

日本の専門家・研究者の中には、稀ではあるが伊勢kなどの文化遺産をその地域社会から切り離し、カンボジア文化の文脈で読み込むことをせず、ただ修復すれば良いという技術的観点から修復のみに終始する技術至上主義、もしくは日本上位主義の人たちがいる。これはいけない。遺跡を守る協力は、ただショベルカーで掘ってクレーンで石材を積み直せば良いというものではない。まず、何よりも遺跡に対する綿密な基礎調査や研究、石積手法などの研究と経験が必要である。現地の技術レベルに適合した技術導入から始まり、現場を見ながら徐々に新機器や先端技術を持ち込まなければならない。

こうした、その地域の文化・社会を尊重しながら文化協力を進めていくという原点を踏まえておかないと、文化遺産の保存協力には決してならない。むしろ遺跡破壊と言われてしまう恐れがある。

7. 「アジア現地に学ぶ」姿勢から文化協力は始まる

こうした文化遺産の研究や保存協力には、発掘手法に習熟した考古学者、修復経験を積んだ建築家、石材を動かせる有能な石工など、まず何よりも「人」の養成から始めなければならない。私たちは王立芸術大学の先生方と共同で人材養成や発掘および修復事業を行ってきた。

私たち調査団の専門家・研究者たちは本当のところこれまでいろいろなところで文化摩擦を起こしている。日本では当たり前のやり方がアジア諸国ではそうではないという事例がたくさんある。しかし、現地の村人や地域住民から学ぶことがたくさんある。この地方の影絵芝居を見るとか民話を聴くこともある。いつ田植えをすとか、どうすれば雨水が抜けるとか、この実には薬効があるとか、毎日住民に教えられることがあるのも事実である。こちらが善意と思っても、現地側は干渉と受け取る場合がある。日本のやり方だけが普遍的とは思わない。こうした文化摩擦は良い意味での相互理解の始まりだと考えている。

アンコール・ワットはカンボジア民族の象徴である。その保存修復は、あくまでも現地の人々の手で将来なされることが原則である。私たちがこれまで 20 年間の経験から得た結論は「カンボジア人による、カンボジア人のための、カンボジアの遺跡保存修復」が必要であるということである。